

はじめに

SDGs

SDGsとは、「持続可能な開発目標」のこと。2030年までに、地球上の様々な問題解決のために世界中の国々が約束した計画です。環境問題に限らず、貧困・差別・紛争などもふくめ、誰一人取り残さず発展し未来にわたって人々が暮らし続けるための目標です。

人々は、大昔から今もなお、より良く生きるために発展し続け、暮らしを変化させてきました。

本展では、SDGsの切り口から大昔の人たちの暮らしの工夫や苦勞を見てみます。盛岡の大昔の人たちの様子から、未来を考えるきっかけになればと思います。

1 ゆたかに生きる

冬に温かく、夏に涼しく、おいしいものを食べ、健康で長生きする。人は今も昔も望んできたことでしょう。人はこのために様々な工夫を重ねてきました。

1-1 もったいない

「もったいない」という言葉は「物をむやみに費やすのが惜しい」という意味で多く使われます。これが資源を無駄にしない暮らしに必要なだと考える人がいました。2004年にノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイさん（1940～2011）です。訪日した時に知り、限りある資源への尊敬や物を大切に使う気持ち「Respect(尊敬・敬意)」をも意味する言葉として感銘を受け、世界中に広めました。物を惜しむ心をも表現する単語は、英語をはじめとした外国語にはあまり無いようです。

「もったい・勿体」という言葉は、古くは室町時代の国語辞典『下学集』(文安元(1444)年成立)に見られ、「正体無しの意味」とあります。正体とは本当の姿、神仏の本体という意味です。また下学集には「勿体なしとは、大いに正理(正しい道理、道筋)を失うこと」とあります。本来の姿や本質を失うという意味です。

現在多く使う意味とは少し違うようですが、日本では古くから使われていた言葉だとわかります。

盛岡の大昔の人も、割れた土器を補修したり、小さくなるまで砥石を使ったり、物を大事に使っていたことが、発掘調査成果からもうかがえます。

1-2 たべる

現在の日本では、食べ物は買うことが大半です。しかし、大昔の人々は動物をつかまえる(狩猟)、野山からとる(採集)、海や川からとる(漁労)、畑や田で育てる(栽培)、交換するなどの方法で食べ物を手に入れていました。遺跡の立地からこの暮らしの様子を知ることができます。自然から食べ物を手に入れた縄文時代は台地に、米作りをする奈良時代以降は平野に、ムラがつくられました。

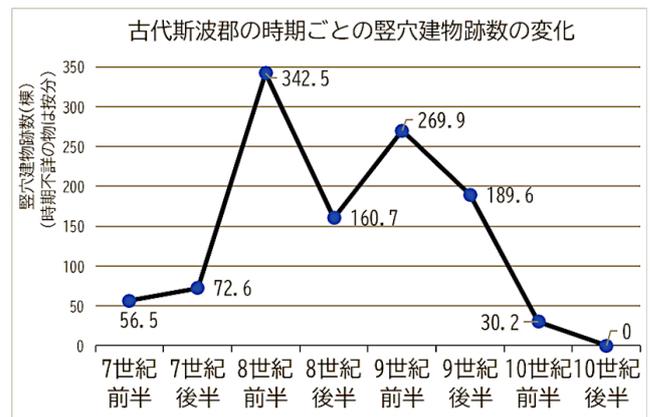
縄文時代以降の人たちはシカなどの動物をつかまえるために「おとし穴」を掘りました。川のそばに掘り動物をおいこんだと考えられます。また、御所ダム建設時に発掘調査



萩内遺跡の鮎復元想像図
(岩手県立博物館 1993 第37回企画展図録『じょうもん発信』より)

された萩内遺跡(繫)からは、縄文時代の「えり(鮎)」がみつかりました。川の中に木の杭や垣をはり、魚をつかまえる施設です。また、海岸近くの縄文時代の遺跡の貝塚からは、イワシ・マグロ・タイなどの魚骨、アサリ・ホタテなどの貝がら、シカの角やイノシシなどの骨がみつかります。縄文時代の人たちは、自然の中で工夫して食べ物を手に入れていたのです。

古代(古墳・奈良・平安時代)以降は、鉄の道具が広がり農業効率が上がり、田畑から食べ物を安定して入手できるようになりました。竪穴建物は方形になり、壁にカマドが作り付けられます。カマドは炉よりも熱効率がよく、固い米を炊くのに適しています。古代の時期ごとの竪穴建物の数から、社会状況をうかがえ



(北東北古代集落遺跡研究会 2014 「9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質から見た、北東北世界の実態的研究」 集成データから作成)

ます。竪穴建物跡が多い時期は人口が多かったと言え、食べ物も多かったと考えられます。これは後述する気候変動とも関係があったと想定されます。

1-3 いのり

科学が発達する前の人々は、豊作や健康は「見えない力」によると考えていたようです。そのため、まじない、いのり、うらない、まつりなどを行いました。

古代には、地域の信仰に仏教や神道など宗教的な教えも加わり広まりました。権力者に広まった仏教儀式、庶民が行ったまじないなど、その痕跡は遺跡から見つかります。たとえば平安時代には、住んでいた家から立ち去る時、カマドを壊したり、土器を伏せて置いたりした人たちがいました。食事を作るカマドには、神様がいますという信仰があったようです。



クマの顔が付いた土器
(手代森遺跡出土)



二又遺跡(下飯岡)の平安時代の竪穴建物跡のカマド
カマド納めの痕跡が見つかった。

2 よりよく生きる

人が生きるには知識や知恵を共有し、よい関係を持つなどの社会環境も大切です。様々な人が住みやすい世界は、誰もがより良く生きられる世界といえます。

2-1 文字を書く

人は文字を発明したことで、知識や経験を広く共有し伝承できるようになりました。目印や記号から意味を伝える文字への変化は6000～7000年前頃と言われます(日本は縄文時代)。古代エジプトのヒエログリフ、メソポタミア文明(イラク)の楔形文字、中国の殷の時代の文字などが古い例とされています。

中国大陸から日本に漢字が伝わったのは、2000年



金印「漢委奴国王」(国宝)
(福岡市志賀島出土・福岡市博物館画像提供)



須恵器 円面碗
(志波城跡出土)
平安時代初期の碗は丸い。

前の弥生時代後半～1500年前の古墳時代頃と言われます。国内の漢字の古い例として知られる「金印・漢委奴国王」は、西暦57年に漢の皇帝・光武帝が、委奴国王に与えた印です(中国歴史書『後漢書』)。

その後、漢字は日本で独自の発展をしました。漢字の読みで日本語の音をあらわす「万葉仮名」が使われ、平安時代には「かな文字」に発展しました。

盛岡市内では、奈良～平安時代以降の遺跡から漢字が書かれた土器が出土します。しかし一文字だけなど、まじないの記号などとして書かれたものが多く、当時の人がどの程度文字の意味を知っていたかはわかりません。一方、国の役所「志波城」(下太田・上鹿妻)には、木簡や紙に墨と筆で文字を書いて仕事をした役人がいました。

2-2 男女の違い

男か女かということで異なるあつかいを受けることもあります。しかし、この生物学的な違いにより、新しい命は誕生します。医療が発達する前は、子が生まれる時に死んでしまうこともありました。今も昔も、子が生まれ育つことへの願いは変わらないようです。

「顔面把手付深鉢」(山梨県指定文化財・津金御所前遺跡出土・縄文時代中期・約4500年前)は、口縁の把手部の顔と本体装飾が母親、本体中央の顔が赤ちゃんを表現し、まさに生まれ出る様子だと考えられています。無事の出産を祈ったのでしょうか。

「足形付土版」(滝沢市指定文化財・湯舟沢遺跡出土・縄文時代後期・約4000年前)は、身長約80cm、体重約10kg、生後10～12ヶ月頃の男児のものと考えられる足形がついたものです。成長を願ったのか、亡くなった子を悼んだのかは分かりませんが、この子を想って作られたことは間違いありません。



顔面把手付土器(出産文土器)
津金御所前遺跡出土
北杜市教育委員会画像提供



足形付土版
湯舟沢遺跡出土
滝沢市教育委員会画像提供

2-3 火をつかう

人と動物の大きな違いに、火を使うことがあります。人は火を使い、料理をし、あたたかくし、明かりをともし、粘土を焼いて土器をつくり、発展してきました。

2-4 きれいな水

人の暮らしに清潔な水は欠かせません。昔の人は川からくんだり、井戸を掘りきれいな地下水をくんだりしていました。市内の中世以降の遺跡からも井戸跡が見つかっています。平安時代末の奥州藤原氏の居館・柳之御所遺跡(平泉町)からは、汚物廃棄穴が見つわかっています。「ちゅうぎ(トイレトペーパーの役割をした木のへら)」が出土し、人の糞尿をきちんと処分していたことがわかります。

2-5 技術の革新

人は道具を使います。道具の材料、形、作り方など工夫をしてきました。大昔の道具には、今も昔も形が大きく変わらない物もあります。たとえば、縄文時代の骨角器の釣針には、今の釣針と同じように、釣れた魚が逃げないように、かえしがあります。



現在と形があまり変わらない骨角器釣針

地球規模の気候変動は、5～7万年ごとの大規模なもの、数千年ごと、数百年ごと、そして約11年周期の太陽活動や火山噴火の火山灰の日照減少などによる数年～数十年ごとの小規模なものがあります。小規模な気候変動が人の暮らしに影響があったことは、遺跡調査成果や日記などの歴史史料からわかります。また、農業には雨の量も影響します。10世紀後半は暑く雨が少なく、日照りになり農作物が少なかった可能性があります。盛岡周辺のムラの堅穴建物数は、この時期減少しています。

3-2 ムラ・町・都市

多くの人が生きてための食べ物を用意するには、多く人の力が必要です。家族、親戚、そして多くの人が集まり、ムラ、町、都市に発展し、集団で仕事を分担するようになったのです。

縄文時代中期の大館町遺跡(大新町・大館町、県史跡)は、南面した丘のムラです。250～200mの範囲に、堅穴建物域、中央に墓など祭祀域、周辺に貯蔵穴域や捨て場など、計画的に使用され、約1000年間にわたってムラが営まれました。

奈良・平安時代の台太郎遺跡(向中野1・2丁目)には、川に面した東西800m・南北500mの範囲に1300～1100年前の大規模なムラがありました。始めは川沿いに、やがて広範囲に堅穴建物が分布しました。農耕と物流に適した場所です。

志波城跡(上鹿妻・下太田・中太田・本宮、国史跡)は平安時代の初め(延暦22(西暦803年)に坂上田村麻呂が桓武天皇の命を受けて造った城柵という政府の役所跡です。930m四方を大溝、840m四方を築地堀(土の堀)で囲み、広大な城内には中心やや南に政庁、その外側に実務の建物群、築地堀沿いに兵舎群などが配置され、数千人の兵や役人が生活しました。

鎌倉～室町時代の台太郎遺跡は、道に沿って、堀に囲まれた領主の居館、ムラ、宗教施設、墓域が営まれました。その後も道や宗教施設など、ほぼ同じ位置で存続しました。

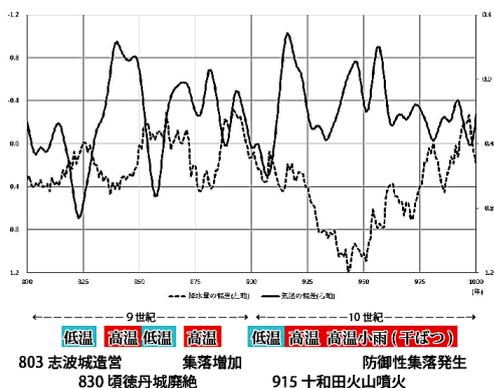
江戸時代、約400年前に南部氏は盛岡城を築き、街道や街並みを整備しました。城のまわりに重臣の屋敷、その外側に土塁や堀(外曲輪)で囲み武士や商人を住ませ、さらにその外側にも土塁と堀(遠曲輪)で囲み、周囲に寺や神社を配置しました。都市として整備され、今もその跡が残っています。

3 協力しあう

人は、自然環境の中では弱い生き物です。しかし、器用な手を使い、知恵を使い、言葉話し、文字で伝え、集団で助け合って生きてきました。

3-1 気候といきる

人は、自然環境の中でしなやかに、たくましく生きてきました。地球規模の温暖期と寒冷期をくり返す気候変動と人の歴史をあわせて考えると、人がどのように生きてきたのか知ることができます。



9～10世紀の気温と降水量

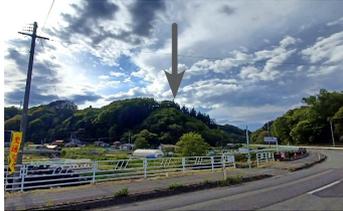
実線は右軸の現代との気温偏差(10年移動平均値)、点線は左軸の現代との降水量偏差(11年移動平均値・値が小さいほど降水量が多い)

伊藤俊一 2022 「気候変動と日本史」IEE Web サイト (https://iee.or.jp/2022/03/exp120310/) 2022.03.10 (2023.05.25. 参照)

3-3 たたかい・あらし

今も昔も、人が集まると様々な争いがあります。

骨の研究から、縄文時代にも殺人があったといわれます。食べ物をめぐむムラの争い、武士達の領土をめぐむ争い、そして国同士の利権をめぐむ争いなど、目的や規模は大きくなっていきました。今もなお戦火の下にいる人たちもいます。人は争いと隣合わせにありましたが、そのたびに話し合い、より良く暮らせるように発展してきました。



竹林館遺跡遠景
山の上に集落がある。

盛岡以北～北海道渡島半島以南には、平安時代後半(10世紀後半～11世紀頃)、不便な山の上にムラが多く営まれました。竹林館遺跡(上米内)は、丘の上に10棟以上の竪穴建物跡やそれらを囲む溝跡が窪地になって残っています。岩手県北部以北などには、同じ時期の大規模な堀と土塁で囲んだムラもあります。木工など山の民のムラか、気候不順から食糧不足が起き、混乱から身を守ったムラなのか、はっきりしません。

国内各地の領主が群雄割拠した戦国時代は、各地に統治と防衛拠点である城館が作られました。安倍館遺跡(安倍館町・上堂)は15～16世紀の城館跡で、北上川の断崖の上の街道沿いにつくられた厨川(栗谷川)城跡です。里館遺跡(天昌寺町)を拠点とした鎌倉時代からの地頭・工藤氏が、戦乱に備え整備したものと考えられます。今も県道沿いに大規模な堀の跡が残っています。

3-4 交流

大昔の人たちは、想像以上に遠くの人たちとも交流していました。必要な物を交換するなど協力していたのです。



アスファルトが付着した縄文時代の石鏃

縄文時代の遺跡からは交流の証となる遺物が出土します。久慈市でとれるコハクは、宝石よりも着火剤として使われたようです。秋田県など日本海側でとれる原油に含まれる天然アスファルトは、石器を柄に付けたり、土器などを補修したりするために使われました。新潟県の糸魚川が有名な産地である薄緑色の美しいヒスイは、大切な石として広範囲に流通しました。

また、奈良～平安時代には北東北の産物が京の都に運ばれたり、貴重な鉄が東北南部などから東北北部に運ばれてきたりしたと考えられます。

おわりに

大昔から、人はより良い豊かなくらしのために、工夫し発展し、力強く生きてきました。その様子は、「持続可能な発展」ばかりではなく、環境を破壊したり、争ってきたりもしてきました。

しかし、人は地球上で命をつなぎ、生きてきました。これを知った今の私たちは、未来の人たちもより良く生きることができるよう考える思いやりをもって生きていけることでしょう。

また、私たちが今いるこの盛岡の地には、大昔から人がいた証拠である遺跡も含めた歴史文化遺産が、豊かに残っていることにも気づけたのではないのでしょうか。そして、この歴史文化遺産から多くを知り、何かを感じられることにも気づけたと思います。

未来の人もそうできるように、今に残る歴史文化遺産を生かし未来へ継承することも、「SDGs・11 住み続けられるまちづくり」につながります。

今回テーマ展が、楽で豊かな時ばかりではなかった大昔の人たちの暮らしと未来に、想いをめぐらすきっかけになればと思います。(遺跡の学び館 今野公顕)

【謝辞】

本展開催にあたり、次の各機関から御協力を頂きました。

記して感謝申し上げます。(50音順)

岩手県教育委員会 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
大船渡市立博物館 宮内庁書陵部 滝沢市埋蔵文化財センター
福岡市博物館 北杜市教育委員会

【参考文献】

- 伊藤俊一 2022 「気候変動と日本史」IEEI Web サイト 2022.03.10
(<https://ieei.or.jp/2022/03/expl220310/>) (2023.05.25. 参照)
- 岩手県立博物館 1993 『第37回企画展「じょうもん発信」図録』
- 内野那奈 2013 「受傷人骨からみた縄文の争い」『立命館大学 633』立命館大学人文学会
- 北東北古代集落遺跡研究会 2014 『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質から見た、北東北世界の実態的研究』
- 黒川雅幸 2014 「もったいない感情の心的機能に関する研究」『実験社会心理学研究 53巻 2号』日本グループ・ダイナミクス学会
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013 『自然災害と考古学・災害・復興をぐんまの遺跡から探る』上毛新聞社
- 笹生衛 2021 「科学データが見せる10世紀に社会が大きく変化したわけ - ヒトと自然、これまでとこれから」國學院大学 Web サイト (2023.05. 参照)
- 国際連合広報局 「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」
- 鈴木尚 1982 「骨から見た縄文人」『日本の美術 189』至文堂
- 中塚武 2016 「高分解能古気候データから始まる新しい災害史研究の方向性」『国立歴史民俗博物館研究報告 203集』国立歴史民俗博物館
- 中塚武 2022 『気候適応の日本史 - 人新世をのりこえる視点』吉川弘文館
- 福岡市博物館ウェブサイト
- 北杜市教育委員会ウェブサイト
- 奈良県立万葉文化館「万葉百科システム」ウェブサイト
- 盛岡市遺跡の学び館 2004 『第1回企画展 陸奥国最前線 - 志波城と北の蝦夷たち』図録
- 盛岡市遺跡の学び館 2007 『安倍館遺跡 安倍氏城柵伝承地と戦国期城館跡』
- 盛岡市遺跡の学び館 2012 『岩手県指定史跡 大館町遺跡 縄文時代中期の大規模なムラ』
- 盛岡市遺跡の学び館 2020 『第18回企画展 不來方之城新築之有可候』図録
- そのほか、各遺跡発掘調査報告書

盛岡市遺跡の学び館 令和5年度テーマ展
「おおむかしのくらしとSDGs」解説資料
2023年6月3日 © 盛岡市遺跡の学び館
Study Museum of Archeological Site / Morioka City, Iwate pref
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13-1

遺跡の学び館
Web Site

